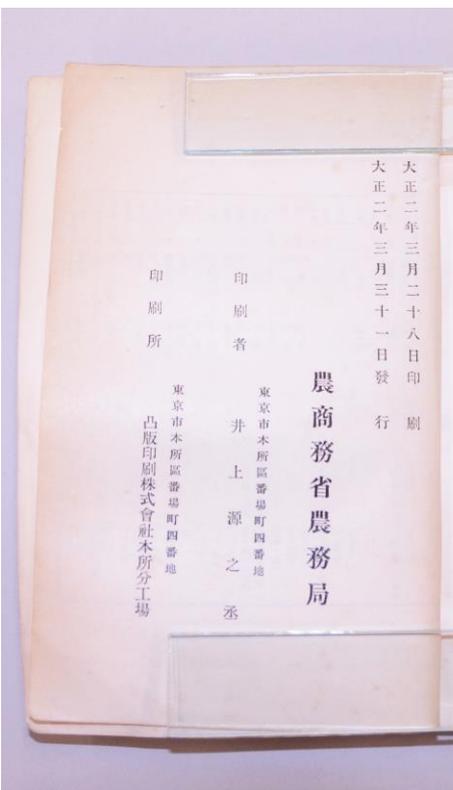
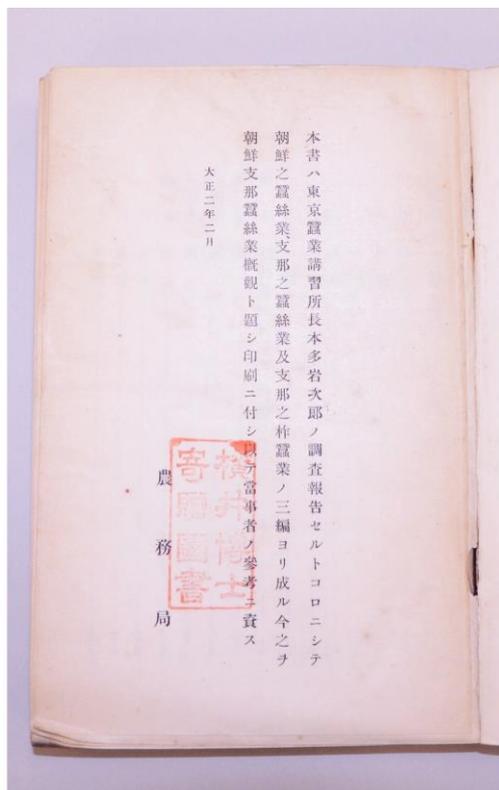


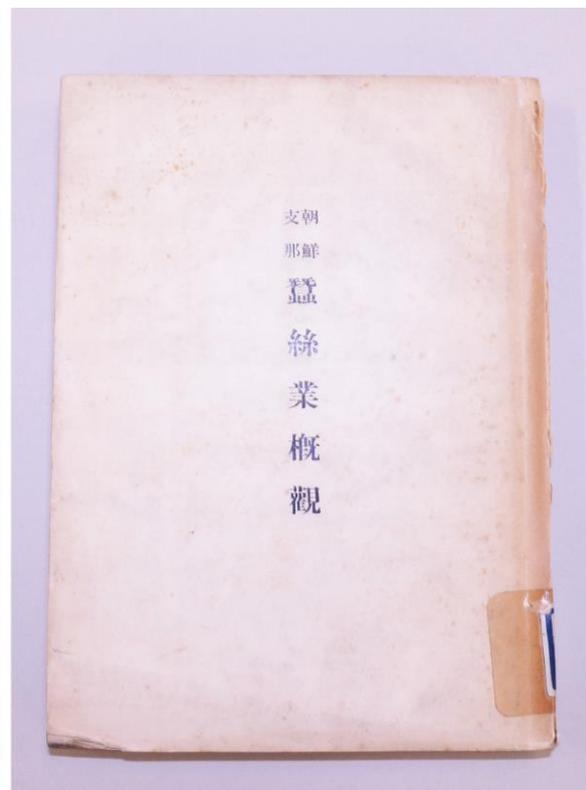
大学史資料室通信



奥付



前書き



表紙

『朝鮮支那蠶絲業概観』(*) 本多岩次郎著

東京農業大学の人々(九)

—近代日本蚕糸業教育の第一人者・本多岩次郎—

東京農業大学と東京農工大学を混同する人は、少なくない。農大を国立大学と誤っている人もけっこう多い。さて、その東京農工大学であるが、大学史をまとめた『東京農工大学百年の歩み』(一九八一年)の目次を繰ってみると、農工大誕生前の記述が「第一部 駒場の伝統(農学部的前身)」と「第二部 西ヶ原の系譜(工学部的前身)」の二部から成っていることに気がつく。新制大学として東京農工大学が生まれたのは昭和二十四年(一九四九)であるが、そのときの農学部の前身は東京高等農林学校(戦時中の短期間、東京農林専門学校)、繊維学部、のちの工学部の前身は東京高等蚕糸学校(同上、東京繊維専門学校)という、それぞれ別の学校であったからである。目次にある「西ヶ原」とは、東京高等蚕糸学校誕生の地、北区西ヶ原にちなんでいる。

この「西ヶ原」は東京高等蚕糸学校「最大の功労者が、初代校長の本多岩次郎である。本多岩次郎については、「西ヶ原の本多か本多の西ヶ原か、とまで言われたほどで、本多校長の歴史は即西ヶ原の歴史でもある」と記されている。日本の蚕糸業教育史では、信州蚕

糸業教育の最大の功労者である三吉米熊（駒場農学校における横井時敬の同級生、上田蚕糸専門学校「信州大学繊維学部の前身」教授）なども著名だが、わが国蚕糸業教育史上の第一人者が本多であることに、異論はなからう。



商議員
農學士本多岩次郎

『東京農業大学 開校十五年記念帖』(*)

本多岩次郎は、短期間であるが、本学の前身、東京農学校の教頭を務めている。明治二六年（一八九三）に育英巒から独立して以降の東京農学校では、河村九淵（本紙第四号参照）のあと、沢村真（同第一二号）↓豊永真理↓長岡宗好（同第七号）と、短期間に次々と教頭が替わったが、長岡の後任として赴任したのが本多であった。明治二八年（一九一五）四月のことである。本多はその前年、明治二七年から本校の講師を委嘱されていた。さらに、明治二九年（一九一六）三月、本多は本校評議

員に就任し、教頭を辞任した。この間、わずかに一年間に過ぎないが、その後も明治三〇年（一九一七）一月までは評議員、同月、大日本農会に本校の経営が移譲されると同時に、横井時敬ほか九名とともに商議員となり、その後、東京高等農学校を経て、大正一四年（一九二五）五月、財団法人東京農業大学が成立するまで、永きにわたって商議員を務めた。本学草創期の功労者の一人と言って良いであらう。



養蚕室 『明治45年 卒業アルバム』(*)



作業風景 『大正2年 卒業アルバム』(*)

さて、本多は慶応二年（一八六六）、豊後杵築藩土工藤常英次男として江戸に生まれ、三菱商業学校、攻玉社を経て、明治一六年（一八八三）駒場農学校に入学した。駒場農学校は、本多の在学中に東京山林学校と合併して東京農林学校となり、本多は明治二二年（一八八八）東京農林学校農学科を卒業した。卒業後、農商務省技手に任官し蚕茶課に勤務、その後も西ヶ原蚕事部試験員兼教員、農務局西ヶ原仮試験場蚕事部評議員、農務局蚕業講習所技師、同伝習部長兼試験部長、東京蚕業講習所

私立東京農業大學増築豫定圖

縮尺六百一十分之一



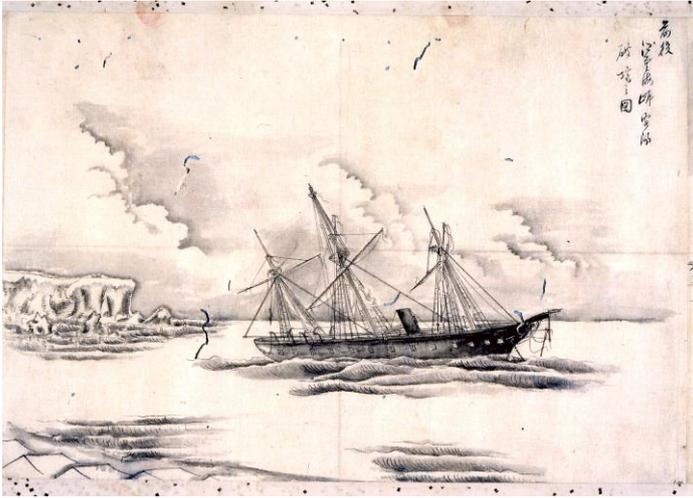
明治45年の敷地と建物配置図(常盤松時代)

養蚕部長兼製糸部長、東京蚕業講習所長と一貫して蚕糸業関係、とくに蚕糸業教育に携わり、大正三年(一九一四)三月、東京蚕業講習所が農商務省から文部省に移管され、東京高等蚕糸学校が成立すると同時に初代校長(兼教授)に任命され、昭和十一年(一九三六)四月、脳溢血により急逝するまで校長をつとめた。この間、大正八年(一九一九)には博士会の推薦により農学博士の学位を授与された。なお、蚕糸業教育以外でも、大日本蚕糸会副会頭、蚕糸業同業組合副会長、日本蚕糸学会初代会長等々をつとめるなど、わが国蚕業界への貢献は計り知れない。

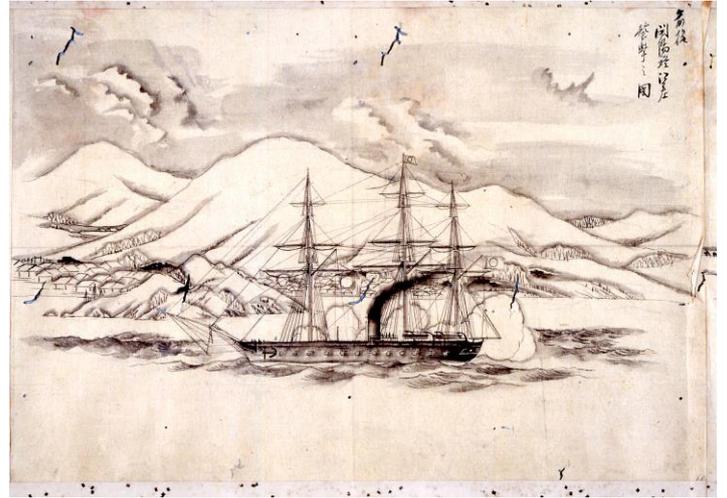
末筆ながら、本多は本学初代学長の横井時敬とは極めて懇意であったという。これに関連して、本多逝去後に西ヶ原同窓会本多先生伝記刊行会によってまとめられた『本多岩次郎先生伝』(一九三八年)は、「是は共に九州人として九州会やその他の関係もあったか。横井博士は熊本出身で同じく熊本出身前生系検査所長紫藤章博士も亦横井博士と親交あつて且本多博士とも親交があり尚蚕糸業関係に於て交渉深かつたが。三人顔を合わせられた時杯は頗る賑はし」かつたと記している。

国際食農科学科 教授

友田 清彦



『麦叢録附図』(*) 江差海岸開陽破壊之図



『麦叢録附図』(*) 開陽艦江差襲撃之図

復元された開陽丸 内部が記念館となっている



(開陽丸青少年センターホームページより引用)

江差港 開陽丸記念館と管理棟



江差港景色

みなみ北海道 最後の武士達ものふの物語

令和元年となる今年には、学祖 榎本武揚公率いる旧幕府軍と新政府軍が戦った戊辰戦争の終結150周年の節目を迎える年です。

最後の戦いとなる箱館戦争の場となった、函館、開陽丸が姿を消した江差の海、これら北海道の歴史や文化の魅力を広く全国に発信するために、標記の記念事業が行われます。上記二枚の図絵が、この宣伝に使われる円筒形展示塔の図案に採用していただけることになりました。これは前号でも紹介した小杉雅之進の手によるものとみられている『麦叢録附図』の中の二枚です。

記念事業はすでに始まっており、令和二年三月末まで開催予定です。

本文中で*印の付いている資料は当大学史資料室の所蔵資料です。

当資料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記までご一報くだされば幸いです。

東京農業大学

図書館 大学史資料室

T 156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話… 03-54477-2526

FAX… 03-54477-2546